岐阜米穀㈱　メールマガジン

今回のテーマは「子実用コーン、なぜ注目」

新たな転作作物として、家畜の飼料となる子実用トウモロコシが注目されています。国際的に飼料価格の高騰が続く中、ほとんどを輸入に頼る飼料の自給率向上につながるため、農水省も転作での増産を後押しします。生産には、どんなメリットや課題があるのでしょうか。

国内自給飼料の増産を後押し!

機械導入と販路
Q：子実用トウモロコシってどんなもの？
A：葉、茎、芯を取り除き、完熟した実の部分を乾燥させて飼料にするためのトウモロコシです。完熟前に収穫して葉、茎、実の全てをサイレージ化する青刈りトウモロコシは粗飼料ですが、子実用トウモロコシは濃厚飼料です。
専用品種ではなく、青刈りトウモロコシと同じ品種を使います。気候条件が適した北海道で2008 年ごろから栽培が始まり、栽培面積や生産量は年々増加傾向です。農水省によると、21 年の栽培面積は 992 ヘクタール。北海道が８割を占めます。

Q：どうやって栽培するの？
A：都府県では４月下旬～5 月下旬に種をまき、９月下旬～10 月下旬にかけて収穫するのが一般的です。種まきは汎用の播種機、収穫・脱穀は汎用コンバインに専用のアタッチメントを付けて行うなど、作業は全て機械化されています。麦や大豆と同じ機械が使えます。
そのため作業時間が水稲や他の転作作物に比べて短いのがメリットです。同省は、10 アール当たりの作業時間は小麦５時間、大豆７時間に対し、子実用トウモロコシは１・２時間だと説明しています。

Q：どうして注目されているの？
A：価格高騰が続く輸入トウモロコシに代わる国産濃厚飼料として、期待が高まっているからです。濃厚飼料の自給率は 12%しかなく、ほとんどを輸入に頼っています。
米需要の減少で、転作の拡大も求められています。農水省は 22 年度から、主食用米からの転換を支援する水田リノベーション事業の対象に子実用トウモロコシを追加し、10 アール

当たり 4 万円を交付するなど転作での増産を後押ししています。

Q：どんな課題があるの？
A：大規模経営ですでに機械を持っていれば、輸作体系に組み入れやすいですが、収穫用アタッチメントは国内メーカー製の場合、80 万～200 万円ほどかかります。汎用コンバインの導入も、中小経営にはハードルが高いといえます。売り先の確保も不可欠です。耐湿性が低く、水田転作では排水対策が必要なことや草丈が高く、収穫期の台風などで倒伏しやすいことにも注意が必要となります。
鳥獣害や虫害の対策も欠かせません。完熟後に収穫するため、青刈りトウモロコシよりも圃場に子実がある期間が長くなります。その分、食害のリスクも高くなります。防除のため、コストや作業時間が余計にかかったり、想定していた収量に届かなかったりする場合もあります。
生産拡大には、こうした課題を考慮し、採算が取れるかを見極める必要があります。

岐阜米穀では 8 年前から北海道の農家の柳原さんと子実トウモロコシの市場づくりに取り組んでいます。北海道産雑穀として導入していますが、皮を剥いたり、胚芽を外したりして大変な手間と時間をかけてきました。エクストルーダーでパフ加工した場合には胚芽を入れることで脂分を加えられ風味が下段に上がりました。加工の段階で割れてグリッツになったら製粉してコーンパウダーにしてみたら、輸入コーンよりも格段においしいものができて驚きました。ただし品種によって味は変わってきます。